

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 10日現在

機関番号：12602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22792257

研究課題名（和文） デイサービスでの世代間交流プログラム実施の効果

研究課題名（英文） The implementation effect of the intergenerational program at the adult day care center

研究代表者

森田 久美子（MORITA KUMIKO）

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授

研究者番号：40334445

研究成果の概要（和文）：デイサービスでの高齢者と未就学児との世代間交流プログラムにおいて、高齢者側に緊張・不安感の軽減、活気の上昇などの変化がみられ、子どもとの心理的距離が短くなることが明らかになった。また、世代間交流プログラムの交流パターンでは、子ども主体型の交流よりも、双方型の交流のほうが高齢者が自分の役割を見出しやすいことが明らかになった。今後は世代間交流プログラムの内容や回数などについて、さらに研究を進めていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：Implementation of the Intergenerational program with preschool children at the adult day care center resulted in significant differences in scores for 'Tension-Anxiety' and 'Vigor'. The present findings also suggest that the program decreases psychological distance from children. The interactive interaction programs allowed older adults to play more roles than the child-led interaction programs. Further development of such beneficial programs is warranted.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学

キーワード：地域看護学

1. 研究開始当初の背景

現在、我が国では世帯構造が大きく変わってきており、高齢者と若い世代の交流が、以前に比べて非常に少なくなっている。このような状況下で、近年、保健福祉サービスの領域では、世代間交流を推進する試みとして、高齢者と幼児や児童を組み合わせたプログラムを実践するところが増えている。

世代間交流プログラムの幼児・児童側の効

果として学習促進、高齢者に対する偏見の緩和、対話の増加、異世代間の相互信頼と理解の構築等、高齢者側の効果として社会的ネットワークの広がり、認知症高齢者の症状の改善等の効果がみられている。

しかし、さまざまな地域で世代間交流の実践が行われているにもかかわらず、プログラムの研究開発や有効性を検証する研究が少ないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、世代間交流の有効性を、実践からの感覚的な評価だけではなく、数値データとして示せるように、尺度等を用いて世代間交流実施前後での高齢者および子ども達の気持ちの変化等を比較する。また、どのような内容の世代間交流プログラム（Intergenerational Program、以下IGPと記す）がより有効なのかを検討することを目的とした。

3. 研究の方法

（1）研究1

①対象：財団法人東京都福祉保健財団が管理するWebサイトに2010年6月時点で掲載されていた東京都特別区の通所介護サービス施設1331事業所から、第三者評価と事業サービスの公開情報を基本に小学校との世代間交流を実践していると記載があった114施設。

②調査期間：2010年6月～9月

③調査方法：電話調査

④調査内容：小学生との交流の頻度、形態、内容、交流の主体、実施場所、コーディネーターの有無、評価方法等

（2）研究2

①対象：デイサービスを利用している重度認知症高齢者15名およびケアスタッフ

②調査期間：2011年5月～6月

③調査方法：IGP実施中のビデオ観察（高齢者調査）およびフォーカスグループインタビュー（スタッフ調査）

④調査内容：基本属性、交流中の行動、発言の有無、表情等

（3）研究3

①対象：デイサービスを利用している高齢者（重度認知症者は除く）49名および未就学児63名

②調査期間：2011年12月～2012年7月

③調査方法：IGP実施中のビデオ観察およびアンケート調査

④調査内容：基本属性、交流中の行動、発言の有無、表情、日本語版POMS短縮版、心理的距離テスト等

4. 研究成果

（1）研究1

①世代間交流の実施状況

世代間交流の実施状況は114施設のうち94施設（82.5%）で交流活動があり、交流なしが20施設（17.5%）であった。小学生との交流については66施設（70.2%）、未就学児は38施設（40.4%）、中学生以上は7施設（7.4%）の実施であった。

②小学生との交流がない理由

小学生との交流がない20施設に理由を訪ねた結果、「小学校側からの依頼がない」が18施設（90.0%）、「工事のための施設側からの断り」と「理由不明」がそれぞれ1施設（5.0%）であった。

③小学生との交流活動の頻度

小学生との交流を実施している66施設において、交流頻度は「年1回のみ」が29施設（43.9%）、「年2回以上」が26施設（39.4%）、「年4回以上」が8施設（12.1%）、「月1回以上」が3施設（4.5%）、「週1回以上」の施設は0施設（0.0%）であった

④交流プログラムの内容

交流プログラムの内容は、「表現を通じた交流活動」が40件（60.6%）、「娯楽を通じた交流活動」が26件（39.4%）、「職業体験やボランティア」が13件（19.7%）、「文化的な交流活動」が3件（4.5%）、「季節の行事内容に準じた交流活動」「創作を通じた交流活動」が各2件（3.0%）であった。

⑤交流活動の形態

交流活動の形態は、運動会や音楽会で練習したダンスや歌を高齢者へ披露する「子ども主導の活動」が59件（89.4%）、ゲームや折り紙等の創作活動を共にする「双方向の活動」が31件（46.7%）、戦争体験を子どもたちへ伝える「高齢者主導の活動」が1件（1.5%）であった。

⑥交流活動の主体

交流活動の主体は、小学校が56件（84.8%）で最も多く、「総合的な学習の時間」の授業の一環として交流を行っていた。次に社会福祉協議会が6件（9.1%）で、ボランティア登録者の斡旋など、学童保育施設が4件（6.1%）であった。

⑦プログラムの実施場所

交流活動の実施場所は施設内が63件（95.5%）、施設外が8件（12.1%）であった。

⑧コーディネーターの有無

対象施設で専任のコーディネーターを配置しているところはなかった。施設のボランティア担当や施設管理者が学校の教員と双方で企画や調整を行い、コーディネーターの役割を兼務していた。

⑨プログラムの評価の有無

すべての施設で評価の実施は客観的な評価測定ツールを用いて行っていないが、59施設（89.4%）が高齢者の表情の観察や感想から交流活動の効果を確認していた。

（2）研究2

①基本属性（高齢者）

男性2名（13.3%）、女性13名（66.7%）、平均年齢は86.6±7.4歳であった。要介護度は要介護度3が6名（40.0%）で最も多く、認知症高齢者の日常生活自立度は15名全員がⅢa、認知症の種類は脳血管性12名

(80.0%)、アルツハイマー型3名(20.0%)であった。デイサービス利用頻度は平均週3.4±1.1回であった。

②行動パターンと発言

高齢者の行動を積極的参加/受身的参加/自己中心的参加/自己活動/非活動の5パターンに分類し、行動パターンおよび交流中の発語の有無について比較した。子ども主体型交流時の利用者の行動パターンは、積極的参加3名(20.0%)、受身的参加9名(60.0%)、自己活動1名(6.7%)、非活動2名(13.3%)であった。双方型交流時はトイレで席をはずした2名を除き、13名全員が積極的参加であった。発言が見られた者は、子ども主体型交流時が5名(うち肯定的発言4名、否定的発言1名)、双方型交流時が13名(うち全員が肯定的発言)であった(表1)。

また、利用者は自分の名前を呼ばれ注目されることや子どもと一対一の直接的な触れ合いにより、徘徊行動等が一時的に消失した。一方、快刺激となっていた子どもが急に去ることで不安感や帰宅願望が出現し行動症状の契機となる可能性が考えられた。

表1 利用者の行動パターンと発言

行動パターン	子ども主体型交流時 (n=15)		双方型交流時 (n=13)	
	n	(%)	n	(%)
積極的参加	3	(20.0)	13	(100.0)
受身的参加	9	(60.0)	0	
自己中心的参加	0	(0.0)	0	
自己活動	1	(6.7)	0	
非活動	2	(13.3)	0	
発言	あり		13	(100.0)
	肯定的	4	(26.7)	
	否定的	1	(6.7)	
なし	10	(66.7)	0	

③基本属性 (スタッフ)

対象者9名のうち、看護師1名、介護福祉士4名、ホームヘルパー4名であった。平均年齢は45.7歳、当該施設での平均経験年数は2年5ヶ月であった。

④フォーカスグループインタビュー

スタッフに対して実施したフォーカスグループインタビューの結果、【正の側面の影響】【負の側面の影響】【世代間交流プログラム継続の意義】【世代間交流プログラム継続の課題】の4つのカテゴリーに分類された。

【正の側面の影響】では利用者は「行動・心理症状(BPSD)」、「情緒面」、「身体的健康面」、子どもは「情緒面」が抽出され、【負の側面の影響】では利用者は「身体的健康面」、「情緒面」、子どもは「情緒面」が抽出された。【世代間交流プログラム継続の意義】では、「介護家族へ喜びの波及」、「子どもと接する機会のある場」、「利用者の社会的孤立予防

」が抽出され、【世代間交流プログラム継続の課題】では、「職員のジレンマ」、「コーディネーター役割の必要性」、「現状維持を温存したプログラムの続行」が抽出された。

(3) 研究3

①基本属性

<高齢者>男性9名(18.4%)、女性40名(81.6%)、平均年齢は85.8±7.1歳であった。

<子ども>男児31名(49.2%)、女児32名(50.8%)であった。4歳児(年中)クラス21名(33.3%)、5歳児(年長)クラス42名(66.7%)であった。

②気分プロフィール(POMS)の変化(高齢者のみ調査)

POMS30項目におけるCronbachのα係数は0.875であった。下位項目の「緊張-不安」「抑うつ-落込み」「怒り-敵意」「活気」「疲労」「混乱」の6つうち、Cronbachのα係数が0.7未満であった項目をのぞき、「緊張-不安」「活気」「疲労」の3項目について分析を行った。3項目のCronbachのα係数は、それぞれ0.748、0.859、0.768であった。

POMSの下位尺度をT得点に換算し分析した。

「緊張-不安」の平均値がIGP前40.0、IGP後37.7、「活気」の平均値がIGP前42.3、IGP後46.1、「疲労」の平均値がIGP前40.5、IGP後39.7であった。「緊張-不安」および「疲労」は得点が低いほど良い状態、「活気」は得点が高いほど良い状態を示す。IGPの前後でWilcoxonの符号付き順位検定を行い、「緊張-不安」(p<0.01)、「活気」(p<0.05)の2項目で有意差が見られた。「緊張-不安」の項目はIGP後に22名(45.8%)の得点が減少しており、緊張・不安の軽減がみられた。「活気」の項目はIGP後に31名(63.3%)の得点が高くなっており、活気の増加がみられた(表2)。

表2 IGP前後でのPOMS T得点の変化 N=49

POMS下位項目	得点減少 n (%)	得点増加 n (%)	得点不変 n (%)	p
緊張-不安 ^{注)}	22 (45.8)	9 (18.8)	17 (35.4)	**
活気	9 (18.4)	31 (63.3)	9 (18.4)	*
疲労	17 (34.7)	9 (18.4)	23 (46.9)	

Wilcoxonの符号付き順位検定

*p<0.05 **p<0.01

注) 1名欠損値のためN=48で分析

「緊張-不安」「活気」「疲労」の3項目におけるIGP前後のT得点の差の平均は、性別によって有意な違いは見られなかった。

③心理的距離の変化

心理的距離テストでは 20 cm×20 cmの四角枠の中央に高齢者の絵が描かれたものを準備し、高齢者は未就学児が遊びに来た時にいてほしいと思う場所に、未就学児は自分が遊びたい場所に、子どもの絵が描かれたシール（直径 1 cm、以下子どもシールと記す）を貼ってもらった。

高齢者の心理的距離の平均は、IGP 前が 3.3 ± 2.4 cm、IGP 後が 2.7 ± 2.3 cmであった。IGP の前後で Wilcoxon の符号付き順位検定を行い、IGP 後に有意に心理的距離が短くなっていた ($p < 0.01$)。IGP 後に心理的距離が短くなった者は 38 名 (77.6%) であった。また、IGP 前後の心理的距離の差の平均は、性別によって有意な違いは見られなかった。

一方、子どもでは IGP 後に距離が遠くなっていたが有意ではなかった。IGP 前後での距離の差について、高齢者と子どもで比較したところ有意差がみられ (Mann-Whitney の U 検定、 $p < 0.05$)、高齢者の方が IGP 後に子どもとの心理的距離が短くなることが示唆された。

④POMS および心理的距離の相関

POMS の「緊張 - 不安」「活気」「疲労」の 3 項目および心理的距離の IGP 前後の差の値について、Pearson の相関係数を算出した。その結果、「緊張 - 不安」と「疲労」において有意な正の相関がみられた ($r = 0.765$, $p < 0.001$)。POMS の各項目と心理的距離では、有意な相関はみられなかった。

⑤高齢者と子どもの位置関係

高齢者を中心として、子どもシールの貼付位置を「真後ろ」「右斜め後ろ」「右横」「右斜め前」「正面」「左斜め前」「左横」「左斜め後ろ」の 8 方向に分類した。高齢者では、IGP 前後ともに「左斜め前」に貼付したものが最も多く、次いで「正面」の位置であった。子どもでは IGP 前後ともに「右横」に貼付したものが最も多く、次いで IGP 前は「左斜め前」、IGP 後は「左斜め後ろ」の位置であった。IGP 前後で、貼付位置（方向）に変化があった者の割合は、高齢者が 28 名 (57.1%)、子どもが 42 名 (76.4%) で、子どもの方が割合が大きかったが、有意な違いは見られなかった (χ^2 検定)。

また、前述の 8 方向のうち、「右斜め前」「正面」「左斜め前」を『前方群』、その他の方向を『横・後方群』として 2 群にわけ、高齢者と子どもで違いがあるか χ^2 検定を行った。その結果を表 3 に示す。IGP 前後ともに、高齢者の方が有意 ($p < 0.001$) に『前方』に子どもシールを貼付していた。

表 3 子どもシールの貼付位置が前方の者の割合

	IGP 前*** n (%)	IGP 後*** n (%)
高齢者	32 (65.3)	35 (71.4)
子ども	19 (30.2)	17 (27.0)

χ^2 検定 *** $p < 0.001$

(4) 今後の展望

研究 1 において、世代間交流を実施するにあたり、専任のコーディネーターはおらず、施設のスタッフや学校の教員がその役割を担っていることがわかった。しかし、施設訪問型の世代間交流を継続していくためには、介護スタッフにとって多くの労力が必要であり、安全確保や感染症発生時のガイドラインが必要である。世代間交流活動においては世代ごとの専門家のみに取り組みをゆだねるのではなく、世代間交流のコーディネーター等が現場で活躍していくことが期待される。また、世代間交流の評価について、感想を聞いたり、表情を観察したりという主観的な評価は多くの施設で行われていたが、尺度等を用いた客観的な評価については、全く行われていなかった。世代間交流のプログラムを運営しながら、施設のスタッフあるいは学校の教員が評価までを行うことは非常に難しく、そういう点においても専任のコーディネーターを配置し、世代間交流の効果をしつかりと明示していく必要があると考える。

研究 2・3 では、デイサービスにて行われている IGP において、20 分程度という短い時間ではあるが、高齢の利用者にとって緊張・不安感の軽減、活気の増加といった気持ちの変化がみられた。これらが IGP 特有の効果なのか、子ども達がいらない通常プログラムでも同様の効果がみられるのかについては今後さらに検討を重ねる必要があるが、IGP に参加した高齢者からは「かわいいね」「元気がもらえるね」「また来てね」など子ども達に向けた肯定的な発言があり、世代間交流の効果の 1 つと考えられる。また、心理的距離が IGP 後に短くなっており、身内ではない他人の子どもであっても、交流により親近感を覚えていると推測される。今回、子ども達においては IGP 前後で心理的距離に有意差がみられなかったが、今後は 1 回の交流だけではなく長期的な交流の効果を調べていく必要があるだろう。

さらに、高齢者の中には「子どもは嫌い」と公言する者もあり、IGP による負の影響についても注意しなければならない。負の影響の 1 つとして疲労の増加ということが予想されたが、有意な悪化はみられなかった。今回の結果では、「緊張 - 不安」と「疲労」において有意な正の相関がみられており、緊張・不安が強いと疲労も増加する関係である

ことがわかった。緊張・不安を軽減するプログラムにすることにより疲労の増加も抑えられそうだが、プログラムの時間や内容について、今後さらに調査を進めていく必要がある。また、子ども好きの程度によって効果が左右されるのかなどについても研究を深めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 森田久美子、小林美奈子：東京都の通所介護施設における小学生との世代間交流の実態調査、日本世代間交流学会誌、査読有、2 (1)、2012、pp41-47.

[学会発表] (計9件)

- ① 森田久美子、小林美奈子：高齢者と子どもの世代間交流プログラム実施による心理的距離の変化、第22回日本健康医学会総会、2012年11月10日、三重
- ② 小林美奈子、森田久美子：世代間交流へ「笑い」と「タッピング・タッチ」を導入したうつ予防プログラム実践の検討、第22回日本健康医学会総会、2012年11月10日、三重
- ③ 森田久美子、小林美奈子：デイサービスにおける世代間交流プログラム実施の効果～プログラム実施前後での高齢者の気持ちの変化～、日本世代間交流学会第3回全国大会、2012年10月6日、名古屋
- ④ Kumiko Morita、Minako Kobayashi：Changes in Elderly Users of a Day Care Center Following the Implementation of the Intergenerational Program with Pre-school children、The 9th International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery、2012年7月1日、神戸
- ⑤ Minako Kobayashi、Kumiko Morita：Effect of intergenerational programs in nursery schoolchildren and users of an adult day service center、INC 2011 The 8th International Nursing Conference、2011年10月27日、ソウル (韓国)
- ⑥ 森田久美子、小林美奈子：デイサービス利用者の世代間交流の効果 第1報～行動パターンによる分析～、日本公衆衛生学会、2011年10月19日、秋田
- ⑦ 小林美奈子、森田久美子：デイサービス利用者の世代間交流の効果 第2報～BPSDへの影響～、日本公衆衛生学会、2011年10月19日、秋田

- ⑧ Minako Kobayashi、Kumiko Morita：Actual condition surveys regarding intergenerational exchanges with elementary school children at adult day care centers in Tokyo、EAFONS2011、2011年2月11日、ソウル (韓国)
- ⑨ 森田久美子、小林美奈子、田沼寮子、佐々木明子：高齢者と子どもの世代間交流プログラムの有効性に関する文献検討、日本公衆衛生学会、2010年10月28日、東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田久美子 (MORITA KUMIKO)
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授
研究者番号：40334445

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：

(4) 研究協力者

小林美奈子 (KOBAYASHI MINAKO)
つくば国際大学・医療保健学部看護学科・講師